

東北学院大（仙台市）の学生たちが東日本大震災の被災地で震災死について聞き取り調査し、まとめた論文集「呼び覚まされる霊性の震災学」（新曜社）が注目されている。幽霊を乗せたというタクシー運転手の体験談のほか、砂川市出身の小田島武道さん（22）は葬儀社の職員がどのように感情をコントロールしたかを伝えた。海外からも取材があるという。

2011年の初夏、宮城県のJR石巻駅近くで冬物コートを着た女性がタクシーに乗車した。目的地を告げる女性に、運転手が「あそこはもう更地ですけど」と伝えると、女性は震える声で「私は死んだのですか？」と聞いてきた。驚いた運転手が後部座席を見ると、誰も座っていないかった。

こうした体験談を調査したのは工藤優花さん（22）。主に石巻市で200人以上に聞き取りし、タクシー運転手4人が「幽霊を乗せた」と話した。タクシーは空車から実車に表示を切り替えるなど、記録が残され気のせいとは言いが切れない。他にも、

「震災死」にどう向き合ったか

東北学院大生が論文集刊行



市民ら11人が幽霊を見たかもしれないなど明かした。石巻市では震災で約3300人が亡くなり、400人以上が行方不明になった。体験談を語った運転手の中には家族を亡くした人もいたが「皆さん、語るうちに悲しい表情から優しい表情に変わり、亡くなった方のことを大切に思っているのが伝わった」と話す。小田島武道さん（中央）と、工藤優花さん（右）、金菱清教授

タクシー運転手「女性の幽霊乗せた」
遺体の火葬作業で感情コントロール

つてきました」と振り返る。調査に参加したのは同大教養学部金菱清教授（社会学）のゼミの4年生7人。それぞれが震災死をテーマに現地で聞き取りし、日ごろ避けて通りがちな死者に対し、被災地の人々がどう向き合ったかを浮き彫りにした。石巻の幽霊現象について金菱教授は「土地柄も含めていろいろと検討しないとなぜ幽霊が現れたのか答えは出ない」と述べる。

小田島さんは石巻市でいったん仮埋葬（土葬）された遺体672体を掘り起こし、火葬する作業を請け負った葬儀社を取材した。遺体は腐敗し過酷な作業だったが職員たちは淡々と作業し、休憩中に意識して笑いを取り入れる「感情管理」を行って乗り切ったことを伝えた。

ほかに、宮城県南三陸町の防災対策庁舎など震災遺構に対する遺族の感情や、孤立化した被災者の心情などが詳しく紹介されている。1月下旬の刊行以来、国内メディアのほか英国、フランスのテレビ局からも取材があるという。金菱教授は「私たちが心のどこかで意識している死について、考えるきっかけになってほしい」と話している。

（東京報道 上田貴子）